

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 バンコクからラオスへ
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 6, pp. 30-31
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 6, pp. 30-31
発行日 / Pub. date	2015, 6



知財見聞録

バンコクからラオスへ

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

誇りある田中義敏研究室卒業生の結婚、美男美女！

昨年末、筆者の研究室卒業生の結婚式がバンコクであり、参列してきた。

5年ほど前に同研究室に在籍していたタイからの留学生2人である。研究室の卒業生が一緒になるとは、なんともうれしい限りである。思い切ってポケットマネーで出かけてきた。

「微笑みの国」タイの結婚式は実に華やかだった。新婦はタイ国知的財産権局の役人、新郎は一昨年前に知財コンサル会社を創設し、短期間のうちに順調に成長しているという、まさに「知財カップル」である。

バンコクにはこれまで何回も訪れているが、タイ語と近い言語の隣国ラオスには行ったことがなかった。そこで、「この機会に」と思い、結婚式の翌日、ビエンチャンへと飛んだ。

ラオスの知的財産事情

ラオス知的財産権局は1990年に科学技術省の一部局として創設された。

1995年にはWIPOに加盟し、1997年からASEAN知的財産協力作業部会に参加、1998年にパリ条約、2006年にPCT、2012年にはベルヌ条約、2013年にはWTOへの加盟を果たし、商標課、著作権課、特許・工業デザイン課、知的財産普及開発課、知的財産紛争処理課、総務課の6課から構成されている。

遅ればせながらではあるが、着実に知財制度の整備および運用の充実に向けて取り組んでいるところである。

2012年のデータでは、商標出願2561件、特許出願53件、小特許（Petty Patent）出願1件、工業デザイン出願31件となっており、約40名の職員が出願から権利化を中心とする知財行政全体を管理・運営している。

現状、職員の実務経験不足、人材育成、優秀なトレーナーの育成、ICTインフラ不足、知財情報のデジタル化の促進等の課題を抱えているが、これらの具体的解決策に加え、今後は、国家知財政策立案、知財情報の活用促進、事務処理の機械化、デジタルライブラリーの整備などに積極的に取り組んでいく検討がなされている。

日本とラオスは、他のASEAN諸国と比べると「遠い関係」といえるかもしれない。日本企業の進出が遅れているからなのか、長い間、フランス領だったラオスに縁遠さを感じるからなのか、詳しい背景は分からない。

知財分野では、結構な人数を受け入れて人材育成に協力しているが、制度運用の遅れは他のASEAN国とは比べ物にならない。日本は同国に対し、さらなる支援をしていくべきであろう。

大都会ビエンチャン

人口70万人といわれる首都ビエンチャンは、さすがに大都会である。

パリの凱旋門を模して建てられた戦没者慰霊塔の門「パトゥーサイ」につながるランサーン通り周辺は多くの自動車が行き交うメインストリートで、実に近代的である。道路の幅も広い。

ビエンチャンのシンボルとなっている寺院「タート・ルアン」を訪ね、仏舎利が納められているという黄金の塔（高さ約45m）を拝んできた。



田中義敏研究室の卒業生。写真左から2番目がGuyさん。3番目がSomさん
結婚式の会場となったSiam Societyの中庭で記念撮影

タート・ルアンは、16世紀、ルアンパバーンからビエンチャンへの遷都時に建設されたそうである。ルアンパバーンは日本の京都に当たる所だろう。だいたい、どの国にも昔の都と現在の都が存在する気がする。タイはアユタヤの旧都、韓国は慶州の旧都等々。

そこで、躊躇することなく、ビエンチャンを後にしてルアンパバーンへと飛んだ。そこは、メコン川とナムカーン川が交差し、世界遺産にも登録されている歴史ある街であった。

街の中央にある小高い山(プーシー)の上にそびえる仏塔(タート・チョムシー)から街を一望してみた。

メコン川の向こう岸に細々と焼き物を作っている村があるというので、渡し舟に乗って行ってみた。村の名前はシャンカロック村(Xangkalok Village)という。

原始的だが、静かで心地良い村

シャンカロック村はガイドブックにも載っていない。推定人口数十人の村の中を奥深くまで歩いていくと、地面の下に掘った窯で焼き物を作っている工場を見つけた。家族経営と思われる何とも原始的な焼き物工場だ。

残念ながら誰も英語を話してくれないのでインタビューはできなかった。

さらに奥まで歩くと、なんと村の小学校を発見した。ちょうど休み時間らしく、皆が校庭で遊んでいた。といっても生徒の数は30人くらいだろうか。パソコンも携帯もゲーム機もない、休み時間には外で走り回ったり、ボールを蹴ったりして、無邪気に遊んでいる。先生と見られる大人が5人いた。

彼らは見慣れない日本人観光客に気づくと、警戒するどころか、あふれるほどに輝く笑顔で歓迎してくれた。

彼らを見ていると、かつて暗くなるまで外で元気に遊び回っていたころの筆者の遠い記憶がよみがえってきた。

今や先進国ではITの発達と引き換えに人間関係が希薄になった気もするが、彼らはそんなことと無縁のようだ。

この村では、大半の子どもが家の野良仕事を手伝い、親や家族の面倒をみていくのだろう。なかには、メコン川を渡り、ルアンパバーンで働く者もあるだろう。ビエンチャンや外国に出て、将来のラオス国の発展に貢献する者も出てくるかもしれない。

ラオスの田舎村で育った子どもと日本のような先進国で育った子どもには、どのような違いが生じるか、そのうち時間が取れたら、じっくりとエスノグラフィー(民族学)的な調査に取り組んでみたいと思うが、果たしていつになることやら……。



戦没者慰霊塔の門「パトゥーサイ」



ビエンチャンのシンボル「タート・ルアン」



土をこね、焼き物の原料を作る

筆者のiPadに笑顔でVサインする子ども